

所長挨拶

学びの場に刻まれた記憶とこれから

うちやま たかのり
内山 孝憲

(理工学メディアセンター所長)



前任者の定年退職に伴い、2025年4月から理工学メディアセンター所長を務めることとなった。理工学メディアセンターには、学生時代（当時は松下記念図書館）からお世話になっている。

学生時代の最も記憶に残っている出来事は、カウンター内で端末を操作していただいたことである。文献検索をお願いしたのだと思う。当時は、固定電話機の受話器を音響カブラーにはめ、電話回線を使用する通信であった。通信速度は300bpsか1,200bpsだったと記憶している。300bpsでは、文字が1文字ずつ表示されるのを、目で追うことができた。ポジティブな記憶として残っていることから、必要な情報に辿り着けたのだらうと思うが、それが何だったか思い出せないのは、操作して下さった職員さんに申し訳なく思う。

大学院修了から数年後、教員として理工学メディアセンターにお世話になることになった。いや、実際には、教員として採用される前年の夏の終わりに、既に理工学メディアセンターでの思い出がある。採用面接の時刻に早めに矢上キャンパスに到着したため、理工学メディアセンターの前の藤棚の下で時間を過ごした。当時はまだ14棟はなく、理工学メディアセンターの前には大きな藤棚があり、その下にベンチがあった。ベンチに座って、緊張で食べ物は喉を通らず、出るものは出し尽くし、それまでの人生で最もストレスを感じた時間を過ごしたように思う。

教員になったばかりの頃は、文献取寄せを頻繁に利用した。文献を取寄せるには、4連だったと思う複写式の伝票の狭い欄に書誌情報を記入しなければならなかった。悪筆である私には至難の技である。幸いなことに、学科の会議室にタイプライターがあったので、これをありがたく使わせていただいた。本来、氏名などは和文で記入するところをローマ字で記入したが、その伝票で処理を進めて下さった職員さんには感謝である。

さて、現在では文献の検索や取寄せは、手元の端末でできる。必然的に、理工学メディアセンターが提供するサービスも変化しつつある。大学院生に授業のことなどを質問できるラーニングサポート、教員が研究内容を平易に紹介するサイエンスカフェ、学生が発表するプレゼンバトルなどの、図書に限らないイベントも開催している。サイエンスカフェは、番外編（研究ではない話題を扱う回、大河ドラマ「真田丸」が放送されていた頃の回やワインの回）の参加者が多く好評を博しているようである。何を隠そう私も、理工学メディアセンター所長就任前にはそれら2つの回にしか参加していない。

理工学メディアセンターの設備としては、声を出してグループ学習ができる場所やオンライン面接に利用できる場所など、学生のニーズに合わせて整備が進んでいる。雑誌の費用が毎年上昇して、それ以外に充当できる予算が限られる中で、職員さんがあれこれやりくりして様々なサービスを提供してくださることは、感謝しかない。感謝といえば、慶応工学会様からご寄付をいただいていることも忘れてはならない。話をサービスに戻す。理工学部独自のリポジトリであるΣStarの運用も様々なサービスの一つである。しかし、ΣStarは、設備・ハードウェア・ソフトウェアの老朽化と運用に必要な技術の問題から、残念ながら2027年度末で現在の形態でのサービスは終了することとなる。

理工学メディアセンター所長に就任した今、私が考えることは、次を担う学生さんに今の時代に相応しい形の充実したサービスを提供することであると考えている。